

教職開発講座 北川 剛司 准教授



学習評価に関する研究

キーワード 学習評価/ 成長支援/ オルタナティブ・アプローチ/

どのような研究をなぜ行っているか

今日、日本のみならず、世界各国の教育政策において、教育の質保証の観点からのスタンダード設定に関する議論が隆盛しています。その一方で、教育の質保証のための指導改善という本来の目的を越えて、学習者に対してスタンダードの達成を一様に求めるといった形で、学習評価へのスタンダード準拠評価の導入が急速に進んでいます。

コンピテンシーや資質・能力といった用語の使用とともに、評価の対象はこれまで以上に広くとらえられるようになっていきます。近年、「パフォーマンス評価」という用語も学校で一般に使用されるようになり、かつて広く取り入れられていた客観テストに代表される単純な知識や技能を問うような筆記式の評価方法以外にも、レポート等の長文での文章記述やプレゼンテーション等の実演形式の方法も積極的に導入して評価がなされるようになっていきます。教育実践を通して学習者に育てようとしているのは、いわゆる「テスト学力」だけではないので、評価におけるこうした変化は歓迎されるべきことです。

ですが、その一方で、評価におけるこうした変化は教育実践に次のようなことをもたらしています。すなわち、以前は、学習全体の中の限られた学習成果に対してのみ、つまり客観テストのような方法で評価される学習成果に対してのみ、学習者に対して「正答」や「目指すべき達成基準」が示されていたのですが、現在では、学習全体にわたって「正答」や「目指すべき達成基準」が示されるようになりつつあります。学習全体がスタンダード準拠評価の対象となりつつあると言えます。あらゆる学習成果をスタンダード化して学習者の学習全体を管理しようとする潮流のなかで、次のようなことが危惧されます。全学習者に共通のスタンダードに照らした一様な評価やそれにもとづくフィードバックは、個々の学習者たちの意思や発達のペースや学習特性を考慮に入れられないということです。

スタンダード準拠評価のこうした問題点をふまえて、どのようにすれば学習評価が個々の学習者にとってより意義のあるものになるかについて研究をしています。

研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

「多様性」という用語は、現に、教育における一つのキーワードになっていますが、グローバル化をはじめとして社会変革が急速に進む中で、学校を取り巻く学習環境や教室の中の個々の学習者のニーズはこれまで以上に多様化することは想像に難しくありません。こうした中で、学習評価は、スタンダードに準拠した評価という普及・定着した評価の方法論を、一度相対化してその意義を検証し直したり、評価のオルタナティブ・アプローチを探索したりする必要に迫られています。

これまで、自然主義的評価 (naturalistic evaluation)、エンパワメント評価、イプサティブ評価 (ipsative assessment) といったオルタナティブ・アプローチや「一人ひとりをいかす」と訳されることもある“differentiate”という考え方について研究を進めています。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

- ・奈良県小学校若手教員育成研修推進委員会委員 (2015年度～至現在)
- ・三重県高等学校国語教育研究会主催評価方法小研究会講師 (2018年度、2019年度、2021年度)
- ・奈良県明日香村教職員合同研修会講師「学習評価について」 (2020年度)
- ・奈良県立郡山高等学校「総合的な探究の時間」にかかわる研修会の講師 (1年生生徒向け講演) (2020年度)
- ・奈良教育大学主催「令和4年度 現職のための公開講座」講師 (演題: 「観点別評価の論点整理」)